
君想ふ華一妖奇譚一

神崎 零夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君想ふ華―妖奇譚―

【Nコード】

N4045BA

【作者名】

神崎 零夜

【あらすじ】

――たとえ華が散ったとしても、私は貴方を愛し続ける……

不可思議な事件が勃発する、ある寂れた町。そこに暮らす少女―千珠神楽。化け物に襲われた神楽は、二人の和服姿の男に助けられる。二人は、自らを“妖”と名乗り、神楽を守るために来た、というが――

“妖の世”と呼ばれる場所で紡がれる、華のように儚く切ない、恋の物語――

序

『おかあ、さん』

少女は闇の中で母を呼ぶ。

嫌になるほどに体に纏わり付く、漆黒。それは、彼女自身の長い髪だった。少女はそれに気づくこともなく自分の髪に怯え、逃れようとその身を振る。

彼女の足元は、何もない。ただ奈落が広がっているのみ——否。少女の足元に広がる闇の底からは無数の白い手が、少女を絡め取ろうと伸ばされていた。白い手は闇の中でも霞むことなく、どこか光を放ちながら大蛇のようにのたうつ。その先にあるのは、小さな少女。

『たす……けて……』

いつも助けてくれる母がいない。どこを探しても、どんなに呼んでも母は来ない。それが何を意味するのか、幼い少女には分からない。

『かぐらのこと、嫌いになっちゃったの……？』

悲痛な叫びを嘲笑うかのように白い手の一つが少女の足に触れる。どこからか下品な笑い声が聞こえ、瞬く間に彼女を包みこんだ。

恐怖。

白い無数の手に絡め取られる、妙な感覚。足搔いても足搔いても抜け出すどころかささらに奈落へ引き込まれていくようで——

『おかあさん』

ただ悲鳴のように母を呼ぶ。彼女にはそれしかこの闇から、この白い手から抜け出す方法が思いつかなかった。

『おかあさん、おかあさん、おかあさ……』

いつも真っ先に駆けつけ、助けてくれる母は、来ない。そう少女が悟った瞬間彼女の意識は途切れ、白い手に導かれるかのように小

さな体は奈落の底へ落ちていく――



闇の中に二人の男がいる。一人はゆったりと上座に座り、もう一人は冷たい畳の上に頭を垂れていた。

「……の娘が覚醒……と？」

「ええ。……と言ったほうが……です……」

冷たい風が音を奪い、男達が何を話しているのかは正確に分からない。

蠟燭の光りは不安定に揺れ、微かな灯し火は上座に座る男を照らし出す。着崩れた着物の上を流れる闇の色を映した髪。顔は見えないが、逆にそれが威圧感を醸し出していた。

「どのような娘だ」

地の底から聞こえてくるような、低い、声。風が止んだ時、その声だけがはっきりと聞こえた。

「あれは厳密に言う……人ですらない。貴方様のような……とは……かと」

跪いている男のほうが僅かに顔をあげ、神妙な顔つきで告げる。その男の表情とは逆に、上座に坐る男の方は^{すわ}楽しげに笑い声を上げた。

刹那、静寂が、風を風ぐ。

男の声を……聞かせようとも言うように。

「なるほどな。興味深い。……益々欲しくなった」

月光が、男の顔を照らし出す。その表情は^{かお}ゾツとするほど冷たく――ゾツとするほど美しかった。

血のように赤い舌先で舐める、^{ろう}蠟の様な指。はだけた着物の胸元から覗く、驚くほどに白い肌。妖艶に微笑むその唇はまるで紅い三

日月のよう。――紅い三日月は、不自然に引きつった。

闇に浮かび上がる、冷たい双眸。髪と同様に闇の色を映す深い色。「だが、もしも邪魔するものがあるならば……」

蠟燭の火が夜風に揺れ、唯一の光りは失われた。風は男の髪を巻き上げる。漆黒と漆黒は絡み合い、一つになって融合していく。

そこにあるのはただただ濃密な闇。光りを許さない漆黒。

光が消え蠟燭の煙が漂うのと同じように、ふっと男が呟いた名が漂う。

甘い声で、そっと囁くように――。



「――っ!!」

ひやりと冷気が、肌を撫でる。

「ゆ……め……?」

――いつもの自分の部屋だ。何も、変わらない。飛び起きた少女はそれを確認し、ほうと溜め息をつく。寝巻き代わりに着ていたジャージが、肌寒いの汗で濡れていた。同じように汗で湿った髪をかきあげる。長く伸ばした髪は、癖も無くストンと元に戻った。

二度寝をしようと眼を閉じたが結局眠れず、少女は起き上がって窓の外をぼんやりと眺めた。幾分まだ暗いが白み始めた空の端が、必死に夜明けを伝えようとしているようで。

――また、あの夢。

関連性は全くないように思えるのに、彼女は昔から二つの夢を一緒に見ることが多かった。その夢を見た後は、昔からろくなことが無い。

一つ目の夢を見た十年前のあの日――思い出したくもない、記憶。

夢の内容は、起きた途端に忘れてしまう。でも、分かる。また、夢を見たんだ、と。

「別に、怖くない」

自分に言い聞かせるように、ポツリと呟く。その自分の声が、微力ながらに勇気をくれた。

少女は再び溜め息をついて、大きく伸びをした。白み始めた空の向こうから、綿のような白が舞い降りる。降り始めた白綿は徐々に激しさを増し、すぐに猛吹雪になった。季節外れの雪風巻は赤い紅葉を舞い散らせ、虚空の果てまで吹き飛ばす。

共に舞う、不吉なほど、白い――

少女の肌が、粟立つ。寒さではなく、恐怖から。

「あの…男……」

夢の内容を思い出したのは、初めてだった。

あの妖艶な男が囁くように言った名前。それは――

せんじゆ かぐら
千珠神楽

紛れもなく、少女自身の名前だった。

序（後書き）

君想ふ華、スタートしました。
駄文ですが、よろしくお願いします。。。

巻 出会いの回雪 【一】

——ねえ、知ってる？最近の事件、あれってさ……：

肌を引き裂くように冷たい北風が、紅潮した頬に吹きつけた。寒さで止まりそうになる足を叱咤し、神楽は更に歩を早める。なれない雪道を歩き、通学用の靴はびしょ濡れだった。

ここから自宅まではまだかなりの距離がある。吹き荒れる雪を睨み、神楽は今日何度目かの溜め息をついた。凍えるような空気の中、長い距離を歩かなければならないのは誰だって億劫だ。生憎、気を紛らわせるような物もない。さっきの自動販売機で缶コーヒーでも買えばよかった、と、神楽は一人後悔した。コーヒーはあまり好きではないが、温かい物でもあればこの寒さも幾分マシだっただろう。

人通りの少ない路地は降り積もった雪のせいでさらに静まり返り、人どころか生き物の気配を欠片も感じなかった。寂れた路地には、もちろん自動販売機なんてものはない。あるのはカラスに中身を食い散らかされ、雪を被ったゴミ袋の山ぐらい。回収する人もいないのか、もしかしたら忘れ去られてしまったのかもしれない——うず高くつまれた、生ゴミ。

鼻を摘みたくなるような悪臭を放つそれらの近くを通り過ぎ、息をついて前を見上げる。

雪は、止まない。ひらひら、ひらひら。神楽の目の前でまるで花びらのように舞い、そして落ちた。憂鬱な灰色の色をした厚い雲の向こうから、次々舞い降りる雪。神楽はそのひとひらを掴む。冷たさを感じさせる間もないほどあっけなく、雪の片は溶け去った。

手の平に残る、僅かな水滴。雪の変化。

この路地でも、また——気配を感じて、神楽は視線を路地の先へ向ける。

先程までと同じ、静まり返った細い路地。

ただ、一つを覗いて。神楽の目の前に、“それ”はいた。

自然、足が止まる。

——ねえ、知ってる？最近の事件、あれってさ……

何故か。聞き流したはずの会話が、頭の中で流れる。その会話を聞いたときに、背中に走った悪寒も、共に。

変化のない町で起こった、大きな変化。それは辺鄙な町で連続して起こる不可思議な事件の数々。神楽もニュースで聞いたただけだが、目玉だけをくりぬかれた殺人や、行方不明になった人もいる。

そのどれもが、人間業ではない殺人でまじごとだったらしい。つまり——人外のものが起こした、事件。

人間では無いものが関係するならば、この十月に雪が降るという、異常気象も納得がいく。

何故、“人間では無い何か”をあっさりと受け入れられるのか——神楽には、分かるのだ。常の人には見えないようなものが、彼女には見える。普通の人間には聞こえないようなものが、普通の人ならば馬鹿らしいと笑うようなものが。

カサ。

目の前の“それ”が動いた。

いや、人の姿をとっているのだから、それという言い方は失礼にあたるのかも知れない。

小さく深呼吸をして、神楽は目の前の“男”を見た。

見上げるような長身で洋服ではなく、灰色や銀に近い色の袴を着ている。浅葱色の羽織を羽織っている様は、あの有名な幕末の警備隊を彷彿とさせた。

少し癖のある髪は、降る雪に紛れるような白髪。緑色と黄色が所々、白を彩るように入っている。

男は癖が気になるのかはねている髪を撫でつけ、途中で諦めて眼鏡を押し上げた。

体が、僅かに震える。

相手にそれを悟られないよう、神楽は自分自身の体を抱きしめた。大きな黒縁の眼鏡の、その奥。その部分から、目が放せない。黒よりも暗く、白よりも潔白な色——残酷で獰猛な獣を思わせる黄金の瞳。光が差すたびに煌き、獲物を逃さない、狩人の眼。男の整った顔立ちのせいで、より鋭く、鮮やかに見える。

男は焦点を神楽に定め、こちらに向かって一步踏み出した。

「あんたが、神楽ちゃんか」

聞きなれないイントネーションが、そう問いかけた。

「——私の、名前……」

神楽の唇から紡がれた言葉は、思っていたよりも弱弱しく、掠れていた。

「俺は神楽ちゃんのこと、何でも知ってるで？」

その声は優しげで柔らかく、本当に神楽の身を案じているように聞こえた。しかし神楽は、体から力を抜くことをやめない。いつでも逃げ出せるように身構え、男を見据える。

「そない怖がらんといてや」

ふわりと空気が暖かくなる。どこから発せられたものかと周りを見回すと、それは男の微笑みの元からだった。

困ったように笑い、髪を撫で付ける男。鋭い黄金の瞳の中には、神楽が想像していた陰惨な光など欠片もなく、暖かな光が宿ってい

た。

——もしかしたら、この男は危険じゃないのかもしれない

そう、頭の片隅に思った、瞬間。

唐突に胸の奥で激しく警鐘が鳴り出した。鐘は、本能は告げる。

この男は危険だと。神楽の意思とは無関係に粟立つ肌も、これ以上男に近づくなと、警告する。彼女の本能は、この男を受け入れることを頑なに拒んでいた。

男が、一步を踏み出す。神楽は、拒絶するように一步下がった。じり、と地面を踏む音が耳朵を打つ。

「俺は、なんも危害は加えへんて」

またしても男が一步を踏み出そうというとき——神楽はもうその場にいなかった。

男から逃れようと、ただ本能が告げるままに走り出し、もと来た道を全力で駆ける。

後ろから、溜め息のような音が聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4045ba/>

君想ふ華一妖奇譚一

2012年1月14日20時58分発行